



山田小だより

～笑顔いっぱい、花の学校～

目指す学校像

すべての子どもの『幸福度』が高まる学校

令和8年5月29日
学校便り第3号
八王子市立山田小学校
校長 橋本 哲也
TEL 042-664-3984

<https://hachioji-school.ed.jp/yamde>

山田小だよりは、誰にとっても読みやすいユニバーサルデザインのフォントを使用しています。

校長 橋本 哲也

「相手の課題」と「自分の言動」は分けて考えること ～6月のふれあい月間に寄せて～

子ども同士がかかわる中では、感じ方（主観的現実）や価値観（共同主観的現実）の違いから、しばしばトラブルが起こります。学校では、そのような場面で、単に「どちらが悪いか」を決めるのではなく、「これからどう関わっていくか」を大切にしながら指導しています。

その際、参考になる考え方の一つが「課題を分離すること」です。これは、「その結果を最終的に引き受けるのは誰か」という視点で、自分の課題と相手の課題を分けて考えるものです。

例えば、「友達が自分のことをどう思うか」「相手がどんな性格、特性をもっているか」は相手側の課題です。自分の力だけで変えることはできません。しかし、自分がどんな言葉を使うか、どんな態度をとるか、相手が嫌がっていることをやめるかどうかは、自分自身の課題です。

ここで大切なのは、相手に困った行動や特性が見られたとしても、それが「いじめでよい理由」にはならないということです。「言うことを聞かないから」「空気が読めないから」「失敗が多いから」「自分と考え方が違うから」等が、からかったり、仲間外れにしたり、傷つけたりしてよい理由にはなりません。

人はそれぞれ、自分なりの「主観的現実」をもっています。同じ出来事でも、「ふざけただけ」と感じる人もいれば、「怖かった」「傷ついた」と感じる人もいます。だからこそ学校では、「相手がどう感じたか」を大切にしています。「やった側の言い分」は、やった側自身の課題の改善に生かすものです。

さらに、集団生活では、「これくらいなら大丈夫」「みんなも笑っているから平気」という空気が生まれることがあります。これが「共同主観的現実」です。しかし、その場の空気や多数派の感覚が、常に正しいとは限りません。周囲が当たり前だと思っても、一人が深く傷ついていることがあります。

現在のいじめの定義も、「された側が心身の苦痛を感じているか」が重要な視点となっています。「いじめ」の内容には、悪口や暴力だけではなく、無視、仲間外れ、SNS上のやり取り、見て見ぬふりなども含まれます。

6月のふれあい月間では、子どもたちに「いじめとは何か」を改めて正しく伝えるとともに、「自分の言動を、自分自身で決めることができているか」を見つめる指導も行っています。周囲の空気やその場の雰囲気にならされるのではなく、「相手はどう感じるだろう」「本当にしてよいことだろうか」と立ち止まって考え、次回類似の場面があったときに、どのような言動を選択できる自分になりたいかを明らかにし、自分で判断する力を育てていきます。

学校では、「嫌だと言われたらやめる」「困っている人がいたら相談につなげる」ことを繰り返し伝えてまいります。そして、子どもたちには、「つらい」「怖い」「苦しい」と感じた時には、一人で抱え込まず、安心できる大人に相談してよいことを伝え続けていきます。

保護者、地域の皆様とも連携しながら、子どもたちが「違い」を理由に傷つけ合うのではなく、互いを尊重しながら安心して過ごせる学校づくりを進めてまいります。

[参考 関連 HP 投稿 ★未確認の内容がございましたらお目通しください]

○5月7日(木) つらい思いをしている子の寄り添いが最優先(いじめ対応)

○4月27日(月) 次の類似の課題対面時に、お子さんにどうなってもらいたいのか(学校と保護者が共有したい指導時の視点)

○5月13日(水) 客観的事実と(共同)主観的現実を意識できる子を育て(客観的事実は一つ、主観的現実、共同主観的現実の人数)